表紙モノ語り

先住民の思いを刻むトーテムポール

作者：ノーマン・テイト　民族：ニスガ
国名：カナダ　1977年受入
標本番号：H0009192

◉

岸上 伸啓（きしがみ のぶひろ）
民博 先端人類科学研究部
カナダ・イヌイットを中心に北方先住民文化の研究をはじめて25年。
現在は、アラスカのイヌピアックの捕鯨文化を研究中。

アメリカのアラスカ東南部からワシントン州にかけての太平洋沿岸は、比較的暖かく多雨で森林資源と水産資源に恵まれている。この地域の住人は北から南まで文化が似ているため北西海岸先住民と一括されるが、その実態は言語を異にするトリンギットやハイダなど二〇以上の民族集団に分かれている。

これらの民族集団に共通してみられる文化的な特徴のひとつに、トーテムポール（巨木柱、以下、ポール）がある。ポールの素材はレッド・シダーで、ワタリガラスやワシなど特定の氏族に関係する動物が、氏族の歴史として独特の形態で彫りこまれている。表紙のポールはニスガのもので、上から巨人、カエル、ワタリガラスが彫られている。

われわれが目にするポールの多くは三メートル以上もあるが、一八世紀にこの地を訪れたヨーロッパ人は小さなポールしか目にしていない。じつは、ポールは、ラッコの毛皮交易の結果、巨大化したのである。この地域に生息するラッコの毛皮が、一七七九年に中国の広東においておどろくほどの高値で売れたので、欧米人はその毛皮を求めて北西海岸にやってきた。この毛皮交易は北西海岸先住民に巨万の富をもたらし、儀礼活動を盛んにさせた。また、外来の鉄器の利用によって巨大なポールが製作されるようになった。

ところが、ますます盛大になる非キリスト教的な儀礼活動を社会悪とみたカナダ政府は、それを一八八四年から一九五一年まで禁止した。その期間、儀礼は表立っては実施されず、ポール作りも低迷した。しかし一九五〇年代からその製作が、儀礼とともに復活し、今でも祖先を記念するためにポールが建立され、儀礼が実施されている。ポールには先住民の思いが彫りこまれている。